

海外研修レポート <Friburg 大学>



研修医 2 年 海部三香子

昨年からスタートした研修医 2 年目を対象とした海外研修に 2009 年 1 月の 1 ヶ月間参加させて頂きました。研修先は、ドイツの Friburg 大学病院の皮膚科(HautKlinik)でした。

今年は海外研修 2 年目ということで、昨年海外研修に参加された先輩方からいろいろと話は伺っていたものの、実際にドイツに行くとなると正直なところ、楽しみ 2 割、不安 8 割といった状況でした。

ドイツ・フライブルグに到着したのは 1 月 2 日の夕方、new year holiday 真っ只中でした。1 月 3、4 日は、HautKlinik の Prof、Chairman の先生がフライブルグやブラックフォレスト、またフランスの田舎町へと案内してくださり、綺麗な景色やおいしい料理を満喫することができ、旅行気分でもとても楽しい時間が過ぎました。

しかし、楽しい時間はあっという間に過ぎ、いよいよ 1 月 5 日から不安で一杯の研修が始まりました。病院は 8 時からスタートで、私たちは大学の personal house いわゆる『寮』で生活していたのですが、その寮から HautKlinik までは徒歩約 35 分。外は摂氏何度の世界。朝 7 時、外はまだ真っ暗。道も分からないし、ちゃんとクリニックまで辿り着けるかどうか不安なままとりあえず出発。迷いながらもなんとか到着し、研修開始となりました。

Hautklinik は、大きく分けて 5 つの建物に分かれていて、その中でさらに細分化され、合計 30 以上の専門分野によって構成されていました。今回、私が研修させて頂いたのは、大まかに述べると一般外来、アレルギー専門外来、レーザー外来、入院、手術の 5 箇所でした。その中でも、一番印象に残ったのは手術研修でした。

手術は生検などの小さなものも含めれば、1 日 30 症例ほどあり、自分が見学したい症例には手洗いで参加させてもらう事ができました。悪性黒色腫のリンパ節廓清術、腫瘍摘出後の皮膚再建術、酒さ外科的治療、鬱滯性皮膚炎に対する静脈抜去術など、その他にもたくさんの症例を経験することが出来ました。術中には、先生方が英語で手術内容を説明してくださったり、質問されたり……。逆に分からないことがあって質問しても分かりやすく、熱心に説明してくださいました。

その他、一般外来でも様々な疾患を経験することができました。例えば、尋常性乾癬、

白癬、性感染症、悪性黒色腫、扁平上皮癌、性感染症、真菌症などなど……。日本でも馴染みの疾患が多く、なんだかホッとしたのを覚えています。しかし、外来は100%ドイツ語で行われるため、皮膚所見だけを頼りに自分なりの診断をつけなければなりません。片手には日本語のテキストブック、もう片手には英和・独和辞書を持ち、悪戦苦闘しながらも疑わしい疾患を考え、質問し、回答をもらうといった形式で進んでいきました。

そうこうしているうちに、ドイツでの生活も1ヶ月となり、病院や寒さにも慣れ、移動はトラムで自由にできるようになっていました。当然、通勤もトラム。行きつけのパン屋さん、レストラン、何回か通ったランドリー、スーパーマーケットも、やっと馴染んできたなあと思った頃、研修期間終了という感じでした。

この研修を終え改めて振り返ってみて、いろいろ大変なこともあったけれど海外研修プログラムに参加し、無事終了することができて本当によかったなあと思いました。なぜなら、皮膚科学の勉強は元より、ドイツに足を踏み入れた時と比較して自分自身のモチベーションが向上したと感じられたこと、考え方の視野が広がったこと、また多少の度胸もついたかなと思えたからです。そしてまた、後々の研修医の方々にもこの研修に積極的に参加し、自分なりの何かを掴んできて欲しいと思いました。

私自身も今後、この海外研修プログラムがより良いものになるよう期待するとともに、今回築いた関係をこれからも継続し、本学のさらなる向上のために生かしていけるように努力したいと思っています。

今回、海外研修に参加するにあたって、ドイツでの研修が良いものになるよう病院との手続きや、あちらの先生方との連絡をとっていただくなど様々なサポートをくださったプログラムディレクターの長谷川徹先生、またドイツまでご同行していただき、皮膚科での研修がうまくいくように病院関係は元より、海外での生活が円滑に進むようにまで様々な面でサポートくださった柏原直樹レジデント教育委員長、藤田喜久先生には大変感謝しています。

また、私たちを受け入れてくださった Schoepf 先生・Tuderman 先生・Nashan 先生には大変お世話になり、心からお礼申し上げます。

そして最後になりましたが研修期間中にも関わらず、このような機会を与えてくださった角田司病院長、植木宏明学長、川崎明德理事長先生をはじめとする川崎医科大学附属病院関係者の皆様に感謝いたします。

